

# 学生の作文に見られる書き言葉表現

梶川 伸\*

## The Tendency to Write Spoken Languages to be seen in Student Compositions

Shin KAJIKAWA\*

### ABSTRACT

I take charge of the lecture of "the introduction to sentence expression" once a week in Osaka University of Economics and Law. The composition through eyes becomes about 1800 parts by (the first half year) in a term in spring, 2008. I worked as a journalist for 37 years. On this account it is one to be worried about sentence expression. Immaturity of the composition technology, youth words used many, young expression, the subject / a predicate / a punctuation mark last for the many divergences such as the disorder of the need element, confusion of the decorum when they read composition and the report of the student with such eyes. There is the overuse of the spoken language in the one of the tendencies concerned about. I am originally different from spoken language in the written language.

When there is the influence of words to enter at the edges such as keeping away from printing type or the television in the scene, it is supposed. I am different from spoken language in the written language. I think that there are many students of the latter. I point out the point by composition guidance, and it will be necessary to revise it. The disorder of the written language will continue unless I do so it.

**Key words:** *write spoken language, student compositions, Sentence Expression* [大阪経済法科大学地域総合研究所紀要創刊号] [Regional Research Institute(RRI), Osaka University of Economics and Law Vol.1 (2009), 63-78 pp]

---

\* 元毎日新聞社編集委員・大阪経済法科大学客員教授

## 1. はじめに

私は大阪経済法科大学で週1回、「文章表現入門」の講座を受け持っている。毎回の授業で作文のテーマを出し、学生が授業中に作文を書く。それを添削し、次回の授業で学生に返している。半期ごとの授業で、受講生は期によって30～40人である。

この授業のスタートは2006年度だった。毎期の受講生の数はそれほど多いわけではない。しかし、通算すると、2008年度春学期（前期）までに目を通した作文は、約1800編になる。

また、私は大阪経済法科大学でマスコミ論の講義をしている。さらに、他の大学でも新聞に関する講座を持っている。これらの講座では、半期に1度ずつ、学生にレポートを書いてもらっている。このため、学生の文章に接する機会はさらに多い。

私は37年間、新聞記者をした。このため、文章表現に関しては気になる方である。そんな目で学生の作文やレポートを見てみると、いくつかの問題点や、懸念される傾向があることに気づく。作文技術の未熟さ、多用される若者言葉、幼い表現、主語・述語・句読点など必要要素の乱れ、文章作法の混乱など多岐にわたる。

懸念される傾向の一つに、話し言葉の多用がある。本来、話し言葉と書き言葉には違いがある。書き言葉は、文字や文書として残ることなどから、あらたまった表現になる傾向がある。また、書いたり、パソコンで打ったりするのは、考えながら作業になるので、筆者なりに整った文章スタイルになる。

これに対して話し言葉は、書き言葉に比べて時間的余裕が少なく、文としては完成度が低いケースが出てくる。また、ほとんどの場合は、相手を見ながらの会話で、面と向かっている分、くだけた表現、省略形、不完全形でも理解できる可能性があるのも、それが許されることもある。

このような傾向のある話し言葉が、学生の作文やレポートにいくつも入っている。その背景には、活字離れやテレビなどの耳から入る言葉の影響などがあると推測される。つまり、現代的な傾向であるとも言える。

この稿では、どのような形で話し言葉が作文の中に混入してきているのか、具体的な例を示しながら、社会状況の影響を考えてみる。なお、この稿では、パソコンなどの機械によって文字化されたものも、便宜的に「書き言葉」と表現する。

## 2. 話し言葉と書き言葉

話し言葉と書き言葉には違いがある。文語体、口語体という表記もある。文語は文書に使われる文字や文章言語の意味を指し、口語は話に用いられる言葉や音声言語の意味を持つ。ただ、文語には固定した言語という意味合いがある。このことから反対に、口語には現代語を示すニュ

アンスがある。話し言葉の方が時代の変化に敏感で、次々と変化していき、その時々時代の色彩を強く持つのであろう。逆に文語は、時代遅れの印象持つことになる。

文語と口語の時代ギャップを埋めるものとして、話し言葉と書き言葉を近づける試みが行われる。明治時代からのこの試みは、言文一致運動と呼ばれる。江戸時代までの書き言葉は、漢文の影響があり、和漢混交文もあって、話し言葉との隔たりが大きかった。それを話し言葉の方向に近づけようとしたのが、言文一致運動と言える。小説では、二葉亭四迷の「浮雲」がその代表として知られる。その後、言文一致は国民運動となった。

新聞でも、同じような試みは繰り返し行われる。私が毎日新聞社に入社したのは1970年である。入社したての若い記者にとっては、新聞記事は固い表現が多いと感じた。

例えば、よく使われる表現として「行われる」があった。「〇〇小学校の卒業式が行われた」「〇〇工事の完工式が行われる」というような表現である。えりを正した固い表現といえる。しかし、会話の中ではこのようなケースでは、「行われる」が使われることはあまりない。一般的には、過去形の場合は「卒業式をした」「卒業式があった」となる。未来形では「完工式がある」「完工式をする」である。

私の入社当時、地の文において、話し言葉を新聞で使うことはほとんどなかった。書き言葉の方が一段高い表現だというイメージが強かった。このため、使うにはかなりの勇気が必要で、記者にとってはタブーに近いものだった。

一方で、取材対象が話した言葉を書く「」（かぎかっこ）の中の会話文は、話した通りの再現を求められることもあった。そうすると、地の文の堅苦しい書き方との間で、違和感を生じることになる。

私は1947年生まれである。団塊の世代と呼ばれ、その世代は権威には反抗的で、慣習にもとらわれない傾向があった。新聞社における文章表現においても同様だった。私も含め、言文一致的な書き方を試す記者も目立った。その影響もあり、最近では「卒業式をした」「卒業式があった」「完工式がある」「完工式をする」の方が一般的になった。書き言葉が時代によって変わった一つの例だろう。

### 3. 意思の有無

学生の作文を添削していると、書き言葉がかなり多く入り込んでいる。学生が新しい言葉、流行の表現を使うことは、当然のことだといえる。書き言葉には古いタイプの表現方法が残し、新しいものを求める若者の体感との間のズレがあるからであろう。

では、言文一致運動や団塊の世代の若い時期のように、意思として書き言葉を作文に導入しているのだろうか。作文を読んだ印象では、あまり個人的な意思は感じられない。それは、書き言葉の混入がパターン化されているからである。どうも、それぞれの意思よりも、時代状況

が強く影を落としているように考えられる。さらに言えば、混入している話し言葉は、作文においても当たり前だと思い込んでいる（勘違いしている）ふしがある。

もちろん、個人的な意思が希薄ではあっても、世代という集団の力が書き言葉を変えていくことはある。しかし、単に時代状況や流行を反映しているだけであれば、書き言葉が悪い方向に変化していく恐れがある。その恐れている傾向が、学生の作文に見られるような気がする。勘違いによる書き言葉の乱れは、是正する必要があるように思う。

#### 4. 学生の作文の特徴

文章表現入門の授業時間は1時間半である。授業は毎回、大きく3分割して進めている。文章に関する講義、前回の作文で気づいたことの指摘、テーマを提供しての作文実習である。作文実習には、40分程度の時間をあてている。テーマは書き出す前に示すので、書く時間にそれほど余裕はない。このため、普段からの書き方や、身についた表現が出やすい特徴がある。特徴がよく現れた学生の文はストックしておいた。

学生の作文に現れた話し言葉や、書き言葉を混乱させている表現を例示する。例示にあたっては、その表現の性格や混乱の現れ方によって、分類しながらまとめた。学生の表記は、忠実に再現することを基本とした。例文は、文章の前に「例＝」をつけることによって示した。例文の終わりは→で示した。また学生の例文を書き言葉に直し、一般的表現に書き換えた場合は、文章の前に「※」の記号を入れた。書き換えが複数になる場合は▽でつないだ。

##### 4-1. 話し言葉の影響

学生の作文に現れた話し言葉も、いくつかに分類できる。話し言葉は正式な表記に比べて、やや砕けた表現になるケースがある。それは、対面によるコミュニケーションの方法として使われてきたので、正しい使用ではなくて少し崩したとしても、理解できるからであろう。そのような使用法が書き言葉に混入したものを「一般的な話し言葉の影響」としてピックアップしてみた。

例＝今は夏に比べて、蚊の量はへったからよかったと思う。それと、5号館の冷房を何とかしてほしいです。→「それと」は、会話の中ではしばしば使う。「それと」を、書き言葉に使っても悪くはない。しかし、地の文では「そのほか」が書き言葉では一般的である。話し言葉が安易に書き言葉に入り込んだ例といえる。※今は夏に比べて、蚊の量は減ったからよかったと思う。そのほか、5号館の冷房を何とかしてほしいと願います。

例＝それと、日本人はコミュニケーションをとるのが苦手で、→上記と同様の例。※それに、日本人はコミュニケーションをとるのが苦手で、

例＝いかにその方が、楽しい生活を送れるかが医療の現場で求められることだと思いました。

あと、「発病前の生活を全部やめてみて、今までの生活と正反対の暮らしをしたらいい」という文章にも目が止まりました。→「そのほかに」の意味を持つ「あと」の表現も、しばしば使われる。上記の「それと」とよく似ているが、さらに話し言葉としての属性が強い。このため、改まった文書では通常使われることはない。しかし、学生の作文では、ちゅうちょなく使われる。話し言葉特有の略し方、との認識が薄いのではないか。※いかにその方が、楽しい生活を送れるかが医療の現場で求められることだと思いました。そのほかに、「発病前の生活を全部やめてみて、今までの生活と正反対の暮らしをしたらいい」という文章にも目が止まりました。

例＝私は地元のステーキ屋でバイトをしていて、ほとんどバイト先に行っていたかと思うくらい、バイトばかりしてました。→「ばかり」は話し言葉で、書き言葉は「ばかり」。「ました」は正式には「いました」。※私は地元のステーキ屋でバイトをしていて、ほとんど店にいたと感ずるくらい、バイトばかりしてました。

例＝1回だけ食べたけど、→「けど」は話し言葉。※1回だけ食べたが、

例＝家だと、残すことは苦痛に思いますが、→「だと」は話し言葉で使われる表現。※家にいると、残すことは苦痛に思いますが、

例＝人だからができる所に目を向け直接現場に行くみたいです。→「みたい」は話し言葉の印象が強い。本来は書き言葉にしにくいはずであるが、そのまま文字化されることがある。※人だからができる所に目を向け、直接現場に行くそうです。▽人だからができる所に目を向け、直接現場に行くようです。

例＝運動が苦手な人向けに「宝さがし」なんてものがあれば全員参加できると思います。→「なんて」は話し言葉のくだけた言い方だろう。※運動が苦手な人向けに「宝さがし」のようなものがあれば、全員参加できると思います。

例＝今のままじゃ特捜部に入るのは無理だと思いますが、→「じゃ」は典型的な話し言葉といえる。あらたまった文書では使わない。※今のままでは、特捜部に入るのは無理だと思いますが、

例＝自分の意見や感想を述べるのが好きじゃないし得意ではありません。→※自分の意見や感想を述べるのが好ではないし、得意ではありません。

例＝文章を書く上で大切なことを学べたらと思います。→「ら」の使い方が話し言葉のような印象を受ける。※文章を書く上で大切なことを学びたいと思います。

例＝前みたいに勝てるか分かりません。→「みたいに」は話し言葉。あらたまった文書では使わない方がよい。「か分からない」のような表現ははやっているが、正式には「かどうか」。※前のように勝てるかどうか分かりません。

例＝僕はもしかしてひき逃げかと思いました。なぜかというとおじいちゃんの頭から血が出ていたので、とても気になりつつ買い物をした。→「もしかして」は話し言葉。「なぜか」と「買い物」に関連がないので、文を切った方がよい。「ですます調」と「だ調」が混在している。

※僕はもしかするとひき逃げではないかと考えました。なぜなら、おじいちゃんの頭から血が出ていたからです。おじいちゃんのことをとても気になりながらも、僕は買い物をしました。

#### 4-2. 話し口調の使用

例＝家の中はもう住める状態じゃなかった。→「ではない」を話す時に、「じゃない」となることがある。これは、話し言葉に限定された表現であると思うのだが、学生の作文では、そのまま書かれるケースがある。※家の中はもう住める状態ではなかった。

例＝コントローラーを動かすだけでなく、→※コントローラーを動かすだけではなく、

例＝バイクが好きなので、白バイ隊員なんかも夢です。→「なんか」は話し言葉特有の口調だと思う。書き言葉で使っても悪くはないが、あらたまった文書ではあまり肯定できない。※バイクが好きなので、白バイ隊員なども夢です。▽バイクが好きなので、白バイ隊員も夢です。

例＝つじつまが合ってなかった。→「なかった」は話し口調。書き言葉では「いなかった」が普通。※つじつまが合っていなかった。

例＝これは個人的やけど、文章が苦手なんで→「やけど」「なんで」は話し口調のまま。※これは個人的ですが、文章が苦手なので

例＝友人なんかで飲みに行く。→「なんか」は話し言葉の表現。書き言葉にする時には手直しをするのが普通だろう。※友人らと飲みに行く。

例＝1400kmも歩くとそろ疲れる。→「そろ」は話し言葉の中だけで使われる。「そりゃあ」と同じ使用法だろう。※1400kmも歩くと、それは疲れる。

例＝はやっているというかバイト先ではやっているのが、→会話の際のためらいや、話の流れの建て直しのための口調が、そのまま書き言葉になっている。通常は文章化する時には、会話より時間的余裕があるので、完全な文章にするのだが、その作業を怠っているといえる。※アルバイト先ではやっているのが、

例＝僕が関心を持ったニュースというよりスポーツは、→「というより」も、話し言葉の中の言い直しなので、書き言葉では不要である。※僕が関心を持ったニュースは▽僕が関心を持ったスポーツニュースは

例＝最初は、末娘のコーディリアが父から勘当されて、悲劇のヒロインっていう感じがしました。→「っていう」は話す口調をそのまま書いている。※最初は、末娘のコーディリアが父から勘当されて、悲劇のヒロインという感じがしました。

#### 4-3. 発音そのままの表記

書き言葉で正確に表現されていても、話す時には話しやすいような音に変えることがある。例えば、「こういう」が「こうゆう」と発音されることがある。特に、家族や仲間などのように、何度が顔を合わせていたり、気をつかわなくてもよい間柄で、気安さから本来の音を崩し

でも許されるといった感覚に裏打ちされているような気がする。しかし逆に、その話す際の音がそのまま書き言葉として表記されると、言葉の乱れとなる。

例＝こうゆう場合、敵の意見を聞くことがないらしい（中略）過去にもこうゆう事件はよくあったが、二度とないことを願う。こうゆう世界からもっと平和な世界になってほしい。→「こうゆう」が多用された例。書くなら「こういう」だが、話す時はたいていの場合、「こうゆう」という音になる。その音を、そのまま書き言葉にしている。話す時と書く時は区別が必要という認識に欠けている。それにしても多用しすぎて、学生の幼さを示しているともいえる。

※こういう場合、敵の意見を聞くことがないらしい（中略）過去にも似た事件はよくあったが、二度とないことを願う。このような世界から、もっと平和な世界になってほしい。

例＝日高さんは多分こうゆう所から読者に自然に興味を持たせたり楽しく考えてもらおうと思っていたのだろう。→上記と同じ例。発音をそのまま書く学生が、まれではないことを示している。※日高さんは多分、このような場面から読者に自然に対して興味を持たせたり、楽しく考えてもらおうと思ったりしていたのだろう。

・例＝「」など使う時は、話し言葉でもいいけど、→「っても」は話し言葉のくだけた形。「けど」も話し言葉。特にこの作文の「っても」は、発音をそのまま表記している。書き言葉に書き換えようという意識が働いていないのではないか。※「」など使う時は、話し言葉でもいいのですが、

例＝ゆえるとすれば、→話し口調がそのまま字になっている。※言えとすれば、

例＝明るいていうかバカなのか→「て」は話す際の音だろう。※明るいというのかバカなのか

例＝いろんな所へ行くんだな～と思いました。→「～」で、話す時の口調を表現しているつもりだろう。書き言葉には基本的でない表記で、口調を再現しようとする工夫ともいえる。ただし、あらたまった文書では、ふさわしくないように思う。→いろいろな所へ行くのだな、と思いました。

#### 4-4. はやりの話し言葉

言葉には、当然ながらはやりすたりがある。日常生活で言葉は不可欠で、会話や文書にその彩りを添える意味もあって、流行語にはみな敏感である。特に近年は、流行語大賞が大きな話題となるように、流行語を使うことによって、みんなで一体感を持つとする傾向がある。

流行語には、文字から始まるものと、話し言葉から始まるものがある。テレビを中心とした映像・音声メディアの発達によって、話し言葉の流行語も多い。2007年ユーキャン新語流行語大賞を見ると、大賞に選ばれたのは「(宮崎を) どげんかせんといかん」と「ハニカミ王子」の二つだった。そのうちの一つ「どげんかせんといかん」は言い回しの面白さが流行語となった。ベスト10に入った大賞以外の流行語は、「(消えた) 年金」「そんなの関係ねえ」「どんだけえ



～」「鈍感力」「食品偽装」「ネットカフェ難民」「大食い」「猛暑日」だった。この中にも、「そんなの関係ねえ」「どんだけ～」は言い回しの面白さに起因するものが二つ含まれている。

学生の作文には、言い回しなどによる話し言葉の流行語や、話し言葉としては定着したが書き言葉としてはまだ違和感のある表現が散見される。

例＝いじめの先頭に立っている教師とか問題外だと思う。→若者を中心に、話し言葉の中で「とか」が多用されている。「など」といった意味、断定するのを避けるテクニック、例示といったニュアンスを含むと分析できる。さらに言えば、断定を避け、少しあいまい性を持たせたがる若者の傾向の反映だともいえる。会話の中でさえも気になるので、文字として表記されると、さらにその印象は強い。※いじめの先頭に立っている教師など問題外だと思う。▽いじめの先頭に立っている教師がいるのであれば、問題外だと思う。

例＝さしみとかは、骨がないから普通に食べれる。→「とか」と、「食べれる」という「ら抜き言葉」が重なった例。「とか」を書く学生は、書き言葉にはなじまない他の表記も併用する傾向がある。※さしみは、骨がないから普通に食べられる。

例＝兄が友達にいじめられた時とかは、間に入って仲裁してくれたりしました。→※兄が友達にいじめられた時などは、間に入って仲裁してくれることもありました。

例＝私だったら「110歳とか死んでるやん」と思うのに、→※私だと「110歳なら死んでいるのに」と思うのに、

例＝体育館とかラウンジは、とてもキレイで居心地が良いけど、クラブハウスとかシャワー室が汚くて、合宿の時とかとても嫌です。→「とか」を多用した例。1番最初の「とか」は正しい使い方だが、後の二つははよりの使い方と分類できる。※体育館とかラウンジは、とてもキレイで居心地が良いのですが、クラブハウスはシャワー室が汚くて、合宿の時など、とても嫌です。

例＝しかし、大学生になっても提出しないとかではいけないと思い、→※しかし、大学生になっても提出しないのではいけないと思い、

例＝気持ち的にはわからないではないが常識ではありえない。→何でも「的」をつける文章が散見される。「私としては」とするところを、「私的には」のように、話し言葉の中で、「的」が本来の使用法以外にも使われている。ユーモア感覚で始まった使用法と思われるが、次第に定着してしまったのではないか。学生の作文では、ためらいなく使っているように思える例が多い。※気持ちとしてはわからないではないが、常識ではありえない。▽気分的にはわかるが、常識ではありえない。

例＝できるだけ内容的に簡単で、→「的」を外しても通じる場合でも、「的」をつけてしまったケース。「的」が癖になっていることを示しているのではないか。※できるだけ内容が簡単で、

例＝ミートホープ社のことを書いていこうと思う。→「いこう」を挿入するケースが目立つ。



「いこう」は、意思が強く入った表現である。しかし、作文を見る限りでは、それほど意思の強さを感じない。不必要なのに、無意識でつけている感がある。プロ野球の試合の後のインタビューで、「これからも頑張っていこうと思うので、応援よろしくお願いします」が、口癖のように語られる。そのようなテレビ画面の影響を受けていることも考えられる。※ミートホープ社のことを書こうと思う。

例＝私はこの文章表現入門を通して、学んでいきたいと思うことが2つある。→「いきたい」は前述の「いこう」と同種の使い方である。やはり、それを抜いた方が良いケースが多い。※私はこの文章表現入門を通して、学びたいと思うことが2つある。

例＝もうそろそろ将来の夢を決めていかないといけないのに、→「いく」も同様の使い方。※もうそろそろ将来の夢を決めないといけないのに、

例＝私はこのニュースを読んで、ありえないと思いました。→「ありえない」は本来の意味にとどまらず、驚きを示す表現として使われる。流行語のような感さえある。話し言葉の言い回しの中に面白さがあったと思われるが、それが作文でも使われる。※私はこのニュースを読んで、通常ではありえないことだと思いました。▽私はこのニュースを見て、本当にびっくりしました。

例＝日本と中国の経済合作がより一層盛り上がってきた。→「盛り上がる」は、話し言葉、書き言葉の区別なく使われる言葉である。しかし、最近では本来の意味から少し離れ、高揚する方向や盛んになる方向の動き全般に使われる。これも、若者の会話などから広がった使用方法であろう。※日本と中国の経済合作が、より一層盛んになってきた。

例＝意識がぶっ飛んでしまいました。→「ぶっ飛ぶ」という表現方法がないわけではない。しかし、話し言葉の砕けた形として、若者の間でしばしば使われる。この例も、その延長線上の書き方と考えてよい。※意識がぶっ飛んでしまいました。

例＝表現方法がいまいち、分からなくて→「いまいち」は話し言葉のくだけた表現。普遍化されてはきたが、あらたまった文書では使わない方がよいだろう。※表現方法がいま一つ、分からなくて

例＝会員してみたいと思った。→名詞＋「する」は話し言葉のくだけた形のはやり言葉として、特に若者の間で用いられる。「お茶する」のような言い方から、すそ野を広げたのではない。あらたまった文章では使わない。※会員になってみたいと思った。

例＝歌詞の世界も独特で、→この場合の「世界」ははやり言葉としての使い方。あらたまった文書では、気をつけて使った方がよい。※歌詞に関しても独特のものが、

例＝この動きはけっこう地球にやさしいし、意外とありかなと最近では思う。→「あり」という言葉を肯定のための言葉として使うことがはやっている。※この動きは案外地球に優しいし、意外と良いのではないかと最近では思う。

#### 4-5. 省略形の要素を持つはやり言葉

話し言葉は、聞き手を見ながらの場合が多いので、身振り手振り、表情など、言葉意外の伝達補助手段を使いやすい。そこで、言葉を簡略化できる可能性がある。それが、現代風に思われたり、しゃれた言い回しだと好感度を持って受け止められることがある。例えば「それなので」とするべきところを、「なので」とした言い方をよく耳にする。これは、省略を伴う砕けた言葉が流行語の域近くまで達していると言ってもよい。そして、簡略形や省略形が、話し言葉での使用範囲を超えて、書き言葉にまで入り込んでいる。

例＝江戸時代の境内は山吹で黄一色だったらしい。なので開墾時に、山吹を意識的に植えていった。→「なので」は話し言葉のくだけた使い方。最近では、話すことを本職にしているようなテレビ出演者も、ためらいなく口に出している。しかし、あらたまった文書では使わない。

例＝海中生物はその逆で、酸素を取り入れて二酸化炭素を排出します。なので、海中生物に大きなダメージを残し、これをほっておくと海中生物は全滅しかねません。なので、各地で駆除しています。→「なので」が複数登場した例。学生にとって、使いやすい用語になっているといえる。※海中生物はその逆で、酸素を取り入れて二酸化炭素を排出します。このため、海中生物に大きなダメージを残し、これをほっておくと海中生物は全滅しかねません。そこで、各地で駆除しています

例＝種をまいても雑草に負ける。なので、苗を育てて植えるようにした。→※種をまいても雑草に負ける。それなので、苗を育てて植えるようにした。

例＝プリントなどは、家に帰ってからとてもよく活用させてもらっています。なので、これからも……→この場合は、「なので」にあたる部分の接続詞は不要で、安易に使っている、ついつい使ってしまう、という傾向を垣間見ることができる。※プリントなどは、家に帰ってからとてもよく活用させてもらっています。これからも……

例＝ヘレン・ケラーは名家の出身であります。資産は十分にあります。なので全盲になった彼女は、両親に支えられ、家庭教師サリバンにも出会うことができました。→※ヘレン・ケラーは名家の出身であります。資産は十分にあります。このため、全盲になった彼女は両親に支えられ、家庭教師サリバンにも出会うことができました。

例＝私は将来、法科大学院の進学を目指しています。なので、文章表現力をつけるために、この授業を選びました。→※私は将来、法科大学院の進学を目指しています。そこで、文章表現力をつけるために、この授業を選びました。

例＝小学校から高校までずっと野球をしていました。なので野球のことしか頭になく、→※小学校から高校までずっと野球をしていました。そのために、野球のことしか頭になく、

例＝バイクのことをいっぱい勉強しました。なので、高校も工業に行きました。→※バイクのことをたくさん勉強しました。そこで、高校も工業に行きました。

例＝F A制度についてもう一度、見直すことが一番大事なことだと思います。なのになぜ、

プロ野球界はそれをしないのだろうと疑問に思う。→「なのに」も省略的傾向を持つ話し言葉のくだけた形をいえる。「なので」と同様、話し言葉の中に入り込んでいる。この例の場合は、「ですます調」と「だ調」が混在していて、書き言葉の乱れがさらに大きくなっている。※F A制度についてもう一度、見直すことが一番大事なことだと思います。それなのになぜ、プロ野球界はそれをしないのだろうかと疑問に思います。

例＝私は正直、車には興味はありません→「正直、」は「正直言って」「正直に言って」の省略形で、話し言葉としては口調として後半部分を省くことがある。その省いたものを、書き言葉でも使った例といえる。※私は正直に言って、▽私は正直言って、

#### 4-6. 若者言葉の多用

学生は若者なので、仲間内や同世代の間で使われる若者言葉を多用する。それは当然であるが、心配な部分もある。若者言葉の多くが、話し言葉から口癖化したり広まったりしたものでしょう。話し言葉は、本来の表現を変形させてしまうことがあり、言葉の乱れにつながっていく恐れがある。そのような若者言葉が文章の中にためらいなく入ってくると、文章が崩れていく恐れがある。

例＝その面白さを相手に伝えても、「えっ」っていう顔をされたりすることも多かった。→「えっ」は若者の間でよく使われる。驚きや予想外のことを意味するようで、そのような時に「えっ」と口にする音自体に意味を持たせたといえる。当然ながら、あらたまった文書では使わない。ところが、学生の作文では散見される。しかし、「えっ」というのが、実は何を表現しているのか具体性がない。「っていう」も話し言葉の印象が強い。「たりする」は使いがちな言葉だが、使わない方がスマートなことが多い。※その面白さを相手に伝えても、「どういう意味」という顔をされることも多かった。

例＝勉強の方も少しやりたいと思います。→「方」は使いたくなる言葉だが、不要なことが多い。さらに、接客業での変則的な言い回しの中に、この「方」がある。飲食店で店員が「飲み物の方、いかがですか」といった応接だ。この言い回しが、一般の会話の中に入り込み、作文にも使われるのだと推測される。※勉強も少しやりたいと思います。

例＝夏休みの中で→「中で」も使わない方がスマートである。オリンピックの水泳で優勝した岩崎恭子選手がインタビューに答え、「今まで生きてきた中で、」と話したのが流行語となり、若者を中心に広がったものと思われる。※夏休みに▽夏休み中

例＝ニンテンドーDSにはまっている。→「はまっている」は、本来の意味から範囲を広げて使われる若者のはやり言葉。※ニンテンドーDSに夢中だ。

例＝考古学者になりたい子→若い人をさす時に、若者はよく「子」を使う。しかし、あらたまった文書では使わないだろう。※考古学者になりたい人

例＝父は「こういう内容だから簡単そう」みたいなことも言ってくれたので、→「みたいな」

は、若者の話し言葉のはやり言葉。特に「困った、みたいな。」のように、「みたいな」で止め、後を省略する言い回しが多い。この場合は「困った、みたいな顔をする。」ということだろう。この流れが、書き言葉にも影響を及ぼしてきている。さすがに、「みたいな」で止めるケースは目立たないが、※父は「こういう内容だから簡単そう」とも言ってくれたので、

例＝雨が降る前のあのジメジメ感がメッチャ嫌いだ。→「メッチャ」は若者の話し言葉のはやり言葉。それも大流行語で、多くの若者にとって、口癖のようにになっている。あらたまった文書では使わない。※雨が降る前のあのジメジメ感が大嫌いだ。

例＝レポートには多くの注意書きがあって毎回少しへこみます。→「へこむ」は若者特有の言葉使い。「へこんでいる」という意味の感覚から、「落ち込む」という意味にも転化して使用される。※レポートには多くの注意書きがあって、毎回少し落ち込みます。

例＝小さいころから、おかんがよく作ってくれて、→「おかん」は、若い男性が母親のことをさす時に使う。しかし、あらたまった文書では「おかん」は疑問だ。※小さいころから、母がよく作ってくれて、

例＝本当にうっとうしいと思う時があるが、→「うっとうしい」は本来は①気分が重苦しい②邪魔になってうるさい、の意味。最近では若者のはやり言葉で、②の解釈をさらに広めて使っているようだが、あらたまった文書では②を広めた意味合いでは使わない方がよい。ただし、かなり広い範囲を示す表現なので、言い換えはなかなか難しい。※本当にわずらわしいと思う時があるが、

例＝次男はぼくと全然似ていなくむかつくやつです。→「むかつく」の本来の意味は、吐き気を催す、むかむかする、など身体的状況を示す。若者のはやり言葉で、人に対して「むかむかする」といったニュアンスで使われる。あらたまった文書では使わない方がよい。※次男は僕とは全然似ていなくて、気に食わない男です。

例＝そんなに歩いて足は大丈夫かと、つっこみたくなる。→「つっこむ」も若者のはやり言葉。「突っ込んで聞いてみる」といったニュアンスがある。あらたまった文書では使わない方がよい。※そんなに歩いて足は大丈夫かと、思わず聞いてみたくなる。

例＝歩行者天国の区域にも関わらず、真逆の場所になってしまい、→「真逆」は若者を中心としたはやり言葉。※歩行者天国の区域にも関わらず、正反対の場所になってしまい、

例＝感想文を書くコトが多く、→このケースの「コト」は、話し言葉に起源を持つのではなく、書き言葉での若者の流行表記と思われる。学生の作文にも、しばしば登場する。カタカナにする必要性を感じないので、むしろファッション・センスのような印象が強い。※感想文を書くことが多く、

#### 4-7. 省略形

省略形は悪いわけではないし、あらゆる場面で使われる。話し言葉、書き言葉の別はないか

もしれない。例えば、新聞では「八尾市教育委員会」のことを「八尾市教委」、「大阪府警察本部」を「大阪府警」と表記するのが普通だ。新聞はスペースが限られていて、文字数の多い単語を縮める工夫をする。

学生の省略形は、どちらかという、同世代間の話し言葉から発祥しているのが多いだろう。そうになると、正式文書やあらたまった書式では、配慮が必要となる。ほとんどの省略形が、かなりの人に理解できるものではあっても、文書が不特定の読み手を想定したものの場合などは、特に気をつけるべきだろう。初出は正規の書き方をし、次から省略形とするような工夫も必要だ。学生生活と関係が深いので、「バイト」はよく出てくる。これも初出は「アルバイト」の方が良い。

例＝音楽関係の部活→「部活」はかなりの人が理解できる。しかし、理解できない人もそれなりにいると思われる。初出だけでも完形で記した方が親切だろう。※音楽関係のクラブ活動  
▽音楽関係の部活動

例＝オールでカラオケやボウリングに行ったりと、→「オール」は「オールナイト」のことだろう。若者の間では通用するが、文字化する際は注意が必要になる。※オールナイトでカラオケやボウリングに行ったりと、

## 5. 方言との関係

例＝これは個人的やけど、文章が苦手なんで→※これは個人的ですが、文章が苦手なので。この例で、「やけど」は関西弁の範疇に入る。弁ということからも分かるように、本来は話し言葉である。ただし、使って悪いわけではない。方言を使うことによって、文章に柔らかさや、親しみを与える。ただし、あらたまった文書になると、違和感がある。

例＝さすが東京やなあ。→「やなあ」は、関西弁の印象がある。「やなあ」と表記するのは、口調そのままを表現しているからではないか。※さすが東京やなあ。▽さすがは東京だ。

例＝私だったら「110歳とか死んでるやん」と思うのに、→本来は「」を使わなくてもよい。「」をつけることで話し言葉となり、「るやん」という大阪弁が入ってきている。あらたまった文書では、あまり話し言葉の色合いが濃くなると、違和感が生じる。※私だと、110歳なら死んでいるだろうと思うのに、

ここでは関西弁、大阪弁、なにわ言葉ということに注目したい。ここで「やけど」は地の文の中で使われている。地の文で方言は使いにくい。ところが、大阪を中心にした関西の言い回しは、全国的にも通用するので、地の文にも入ってくることがある。ただし、気になるほど多いわけではない。

大阪経済法科大学は大阪府八尾市にある。大阪弁が日常的に使われる地域で学生は生活しているので、大阪弁が書き言葉の中に進出するのもうなずける。

では、学生の出身地はどこか。2008年春学期の文章表現入門の授業を受けた学生について、出身都道府県を教えてもらった。それによると、▽大阪府13人▽奈良県2人▽和歌山県2人▽滋賀県1人▽兵庫県1人▽石川県2人▽鳥取県2人▽山形県1人▽東京都1人▽広島県1人▽香川県1人▽徳島県1人▽高知県1人▽佐賀県1人▽宮崎県1人だった。

大阪府出身が1番多く、約6割が近畿出身である。このために、作文の中に登場する関西弁が多いともいえる。しかし、他地域の方言があまり地の文としては見かけないことを考えると、関西弁はそれ自体の力によって書き言葉に入り込んでいると考えてよいように思う。

大阪市・ナンバの地下街「なんなんタウン商店街振興組合」が毎年、大阪弁川柳コンテストを開催している。作品を公募し、審査をする。大賞や優秀賞が決まると、マスコミに取り上げられることもあり、定着してきた。成功の要因は、大阪弁に限定したことにあるのではないか。

私は毎日新聞の記者として、2003年のコンテスト結果を取材したことがある。大賞は「大阪が こない騒いで すんまへん」だった。プロ野球阪神タイガース優勝をテーマにしたものだった。作品には「今年は大阪ばかりが盛り上がりました。少し優越感を込めて」と添え書きがあったそうだ。句の「すんまへん」は謝っているわけではなく、大阪弁独特のほんわかしたとした表現で、うれしがっているのである。

このことでも分かるように、話し言葉である大阪弁は、文字化しても持ちこたえられる力を持っているようだ。このため、学生の作文にも、大阪弁を軸にした関西弁が見られるのではないだろうか。

## 6. 学生の作文における他の傾向

学生の作文を添削していると、これまで取り上げた以外にも、いくつかの傾向が見て取れる。十分に作文作法を習得していない学生も多く、問題視しなければならない傾向も見られる。

それらを列挙してみる。作文作法の未熟さは、▽主語・述語の混乱▽句読点の使い方の混乱▽「ですます調」と「だ調」の混在▽書き出しの1字明け、段落の取り方などの不統一▽文章を完全形にしない——などが挙げられる。

そのほかにも、▽ら抜き言葉▽飾る言葉と飾られる言葉が離れる▽安易な省略▽文章を完成させない▽カタカナの多用——も目立つ。

また、根本的に、幼い表現がいくつも見つかる。例えば、「すごい」という言葉が多用される。例示すると、▽たくさんのやる気にさせるあのプレーの数々は本当にすごいです▽30歳を超えてもずっと努力をし続けて今年度の全仏、全英でのダブルス準優勝は本当にすごいことだと思います▽すごく現実的なことだけど、就職にとってはすごく大切なことだと思ったからです——といった具合だ。もちろん、「すごい」が悪い言葉ではないし、使っても構わない。ただ、他の表現を考えようという工夫をせずに、安易に「すごい」を使うことが問題である。

## 7. まとめ

学生の作文の中から、話し言葉をピックアップしてきた。それは、学生の作文の問題点の中で、かなり目立つ傾向とを感じるからだ。話し言葉が書き言葉に入り込むのは、決して悪いことではない。また、書き言葉が変化していく時の、大きな要因の一つになっているのも、話し言葉であろう。

ただ問題は、学生たちが意思を持って言文一致を目指したり、時代からは遅れていく書き言葉の改革を考えたりしているようには思えない点だ。話し言葉の書き言葉への混入が、無意識のうちになされているのではないか。

活字離れの傾向が、若者の間で顕著になっている。一方で、テレビが生活の中に深く入り込んでいる。この影響は大きいと思われる。

日本新聞協会の「2005年全国メディア接触・評価調査」によると、新聞の閲読時間は平日朝刊で26.0分だった。しかし、15～19歳は12.4分、20歳代は16.3分となっている。若い世代ほど、新聞を読む時間が短い。

私が担当している2007年の大学の三つの講座で、学生に新聞の閲読時間を聞いたことがある。その結果、1日の閲読時間0分（新聞を読まない）という学生がそれぞれ、14.3%、58.3%、32.3%だった。親元を離れていて節約のために新聞をとっていないなかったり、インターネットで新聞をよんでいたりする学生も含まれるが、新聞離れの傾向は顕著だと言わざるをえない。

また、二つの講座ではテレビの視聴時間も調査した。1日の視聴時間では、一つの講座で1時間半～2時間、もう一つの講座で2時間半～3時間の学生が多かった。

毎日新聞の第61回読書世論調査は、2007年5月の1カ月間に読んだ本を調べている（教科書、参考書、マンガ、雑誌や付録を除く）。1カ月の平均冊数は、▽小学生9.4冊▽中学生3.4冊▽高校生1.6冊となっている。大学生よりさらに若い層でも、活字離れの傾向が見える。特に高校生の本離れが目立ち、その延長線上にある大学生にも影響が出ていると推測できる。

学生は新聞や本よりも、テレビへの接触時間が圧倒的に長い。テレビは話し言葉が多用される。最近はトーク番組が目立つ。話し言葉の番組である。「芸人」と呼ばれるタレントも多数登場し、少し砕けた話し言葉を多用し、ギャグも盛り込む。これらが、学生の言葉に与える影響は大きいと思われる。

学生がそのことを認識していれば、問題はない。しかし、作文の中に大量の話し言葉が入っているのを見ると、無意識に使っている人が圧倒的に多いとみていいだろう。文章表現入門の授業で、作文を書いている時、「○○は話し言葉ですか」と質問する学生もいる。

話し言葉と書き言葉には違いがある。その違いを分かったうえで話し言葉を使うのか、分かっていないまま使うのかの差は大きい。私は後者の学生が多いと考える。作文指導でその点を指摘し、修正していくことが必要だろう。そうしないと、書き言葉の乱れが続くことになる。



(2008年11月14日受稿、2008年12月20日掲載決定)

### 参 考 文 献

- 1) 日本新聞協会：「全国メディア接触・評価調査」、日本新聞協会のウェブサイト、2005。
- 2) 毎日新聞：「第61回読書世論調査」2007/10/26・27。